部屋の隅にある食器棚のなかには、マグカップと一緒にインスタントコーヒーやお茶っぱ、煎餅やクッキーといった菓子類がどしゃっと入っていた。
「なんか飲みますか？」
連絡帳を書いている林田に声をかけると、「気、使えるんだ」と、にやりとされた。
「べつに飲まないならいいんすけど」
風汰（ふうた）がムッとすると、「じゃあコーヒー」と言って、林田はまた連絡帳に視線をもどした。
エンゼル保育園では0歳児から年長まで全員、個人の連絡帳というものがあって、担任は子ども一人ひとり、その日の様子や出来事などを連絡帳に書いて保護者に手渡す。風汰も職場体験の記録を毎日書くようにと、学校からプリントを渡されているが、毎日三、四行書くだけでもうんざりしている。
「はい」とマグカップを置く。「ありがとう」と林田はそれに口をつけて、一瞬眉間にしわを寄せたように見えたけれど、とくになにも言わず、もう一度口をつけた。
「そういえば昨日、太郎君の迎え何時だったんすか？」
煎餅に手を伸ばしながら風汰が言った。
「六時だったかな」
「六時？　あんなに熱があったのに!?」
「いつものお迎えは七時だから、お母さんとしては早く来てくれたんだと思うよ」
「おっせーよ」
「仕事の都合があるからね」
「なんか無責任っすね。自分の子なのに」
バリッと音を立てて煎餅をかじった。
「つーか、保育園も悪いんすよ」
「なんで？」
「だって、なんでもかんでもやってやって、だから親があてにしてさ。めーわくかけられてんの、子どもじゃん」
煎餅のかすをこぼしながら言う風汰をじっと見て、林田は口角をあげた。
「あたしたちはさ、お母さんのためじゃなくて、子どものためにしてるんだよ」
「そっすか？」
ふてくされているような風汰の様子に林田は笑った。
「じゃあ例えば、カレーを作ってて、うっかりルーを切らしてたって気づくことがあるじゃない」
「え、ある？　カレー作ろうと思ってルーがないの？」
「あるの。しかもお化粧も落としちゃってて、もう買い物も行きたくないってとき。そういうときに限って、夫も帰りが遅くなるなんて言うわけよ」
「え！　リンダ、結婚してんの？」
「してないよ。だからたとえだってば」